様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目： 基盤研究(C)
研究期間： 2007～2009
課題番号： 19520438
研究課題名（和文）日本語を第二言語とする者の相互行為能力に関する研究
研究課題名（英文）The Interactional Ability of Speakers of Japanese as a Second Language.
研究代表者
柳町　智治（YANAGIMACHI TOMOHARU）
北海道大学留学生センター・教授
研究者番号：60301925

研究成果の概要（和文）：人々のインタラクションは、日常の具体的な実践の文脈に埋め込まれている。そして、そうした文脈には発話や発話者だけでなく、聞き手、非言語、人工物といった様々なリソースが存在し、それらが人々のインタラクションにおける一つ一つの発話順番の積み重なりに深く関わっている。本研究では、こうした視点から多くの自然会話の事例を分析していくことを通して、日本語の使用と学習の問題を再考し議論していった。研究の目的としては、(a) 日本語を母語あるいは第二言語とする者のワークプレースおける自然会話を、微視的かつボトムアップに記録し記述し、(b) こうした相互行為実践の具体的場面の事例的研究を蓄積し、最終的に日本語教育における学習や教授に関する提言を行うことであった。

具体的成果として、さまざまなワークプレース（大学の実験室やアルバイト先の飲食店やボクシングジム）におけるデータの分析から、(1) 彼らが会話への参加の微妙な調整を通して「参加」を組織化している様子、(2) 聞き手、非言語、人工物といった様々なリソースを通してインタラクションがマルチモダルに組織化されている様子、(3) 参加者による「職業的／専門的な見方」、つまり、「ある社会グループに特有の興味関心に応じる、社会的に組織されたものの見方や理解の仕方」が形成され志向され、また理解される様子、さらに、(4) 人々は純粋な個体としてそこにいるのではなく、むしろ、周囲の人、モノ、テクノロジーとの布置連関のあり方を通して我々の前に立ち現れており、彼らはそうしたリソースやネットワークへのアクセスのあり方そのものであること、を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research, based on the notion of learning as an interactional achievement and the function of language as media with which people coordinate their participation in interaction, examined how speakers of Japanese as a first and second language coordinate their participation in and organize their interaction, and make their learning in the work place observable to each other. This research examined the naturally-occurring conversational data collected at various work places including science laboratories in a university, restaurant, and boxing gym. Based on the analysis, the following findings are discussed: people engage in real-life communication in order to perform authentic tasks, and in such communication, semiotic resources such as talk, non-vocal behaviors, and artifacts in the environment are producing meanings reciprocally. Furthermore, removing language from the structure of interdependence of the resources and discussing the use and learning of language per se will probably lead to a false understanding of what people are actually doing and learning in interaction. This research also offered discussion and suggestions on the redesign of second-language teaching in the classroom.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	270,000	1.170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本語教育
科研費の分科・細目：
キーワード：相互行為、インタラクション、第二言語、日本語教育、能力

１．研究開始当初の背景

第二言語による会話能力を「具体的な実践を相互行為として組織化する能力」という観点から分析・考察しようとする場合、協働的実践への「参加」には、以下の二つのレベルでの「参加」があり得る。つまり、(1) 第二言語話者が属する実践のコミュニティーへの「参加」という意味での、マクロな分析の単位としての「参加」、(2) 個々の相互行為の局面局面で相手と協働的に相互理解を達成していくという、ミクロな分析の単位としての「参加」、の二つのレベルである。実は、こうした二種類の「参加」は決して互いに独立したものではなく、むしろ互いを相互的に構成する要素になっていると考えられるが、これらの「参加」を分析の単位にすることで、相互行為の組織化のためにどのような道具立てが用いられているのか、どのようなリソースがそこにあるのか、という新たな視点から第二言語話者と母語話者のインタラクションを捉えていくことが可能となると考えられる。申請者は、平成 16 年～18 年度に受けた科研費による調査では、主に上記(1)のマクロなレベルから第二言語話者による実践のコミュニティーへの「参加」の様子を調査した。そこで、本科研では、後者(2)のミクロのレベルでの第二言語話者の相互行為への「参加」の調査を計画し実行した。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の通り：
(1) 日本語を母語あるいは第二言語とする者のワークプレースおける自然会話を、微視的かつボトムアップに記録し記述する。
(2) こうした相互行為実践の具体的場面の事例的研究を蓄積し、最終的に日本語教育における学習や教授に関する提言を行う。

３．研究の方法

日本語を母語あるいは第二言語とする者の相互行為をさまざまなワークプレースで録画し、記録した言語、非言語データを詳細に文字化し分析する。背景となるフレームワークは、主に会話分析（Conversational Analysis）および状況的学習論である。

４．研究成果

本研究の成果は、以下に示すような４点に大きく分類される。

(1) 「会話への参加を調整する能力」：研究代表者の柳町智治は、飲食店でアルバイトをしている留学生が日本語によって互いにインタラクションしながらその場での実践を達成していく場面の分析を行った（柳町 2009、Yanagimachi 2010）。この分析は特に、二人の話者が同時に同内容のことを発話する「コーラス」あるいは「リエゾン」と呼ばれる現象を対象とした。そこでは、二人の話者が互いの発話に細かい注意を払いながら自らの参加を調整し、それを通して、その場での活動（当該場面で重要な事柄を教え学ぶということ）を協同で組織化していく様子が観察された。この分析はまた、「言語形式が母語話者のように正確さで適切か」というこれまで一般的に用いられてきた基準ではなく、「会話への参加を調整する」能力として第二言語話者の相互行為能力を見ていくことの重要性を明らかにした（柳町 2008）。

(2)「マルチモダルなインタラクションの組織化」：研究代表者の柳町と分担者の岡田みさをは、相互行為を発話だけでなくそれ以外の要素との関わりを通した、「マルチモダルな

組織化」という視点から分析していった。なぜなら、相互行為の文脈には発話や発話者だけでなく、聞き手、非言語、人工物といった様々なリソースが存在し、それらが人々のインタラクションにおける一つ一つの発話順番の積み重なりに深く関わっているからである。このような観点から、柳町は大学の実験室や飲食店において収集されたデータを、岡田はボクシングジムで収集されたトレーナーとボクサーのやりとりのデータの分析を通して、それぞれの場面における相互行為のマルチモダルな組織化の諸相を検討した（岡田・柳町 2008、岡田 2009、Okada 2010）。

このように、近年の相互行為分析の発達は、人々のインタラクションを発話以外のリソースも含め捉えていくことの重要性を示している。上述の成果(1)の「会話への参加を調整する能力」を捉える際にも、言語化された発話データのみを扱うのではなく、ジェスチャー、視線、姿勢などの非言語要素や環境中の道具等の人工物（アーティファクト）がコミュニケーションのリソースとして組み入れられている様子を解明することが不可欠となることを議論した。

(3)「職業的な見方」の組織化：本研究では、調査者があらかじめ設定した人工的環境で会話データを収集するのでなく、飲食店、研究機関、スポーツジム等で作業に従事する者のダイナミックでリアリティのある実践場面を記録しデータとして使用した。こうしたワークプレースにおいて参与者が志向しているのは「職業的／専門的な見方」、つまり、「ある社会グループに特有の興味関心に応じる、社会的に組織されたものの見方や理解の仕方」（Goodwin 1994: 606）である。本研究では、そうした見方がどのように形成され志向され、またどのように理解されているのかを分析考察した（柳町 2007、岡田 2007、岡田・柳町 2008、Yanagimachi & Okada 2008)。

(4)「ハイブリッドのデザイン」としての教室と学習者：上述の(2)と(3)と関連して、本研究では、日本語の学習者を「ハイブリッドのデザイン」という視点から検討した（柳町 2009）。具体的には、学習者とは純粋な個体としてそこにいるのではなく、むしろ、周囲の人、モノ、テクノロジーとの布置連関のあり方であり、そうしたリソースやネットワークへのアクセスのあり方そのものであるという議論である。教室の内外を問わず、人々にとって最も重要なことは、その時々の実践をどのように達成していくかであり、そのためにどのようにインタラクションを組織化していったらいいかである。この立場にしたがえば、「学習」や「教えること」を議論するのに重要なことは、単に個体内に知識や技能が蓄積されたのかではなく、むしろ、人々が、人、モノ、テクノロジーのネットワークに参加しインタラクションを組織化していく様子を記述し、それによって授業や教室のデザインを考えていくことだと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

柳町智治 (2009)「第二言語話者によるインタラクションへの参加と学習の達成」『社会言語科学』12 (1)、57-66（査読あり）

岡田みさを・柳町智治 (2008)「インストラクションの組織化--マルチモダリティと「共同注意」の観点から」『社会言語科学』11 (1) 、139-150（査読あり）

〔学会発表〕（計７件）

Yanagimachi, T. (2010). Learning as an interactional achievement: Second-language speakers' choral co-production in the workplace. Invited lecture at the International Symposium on Language Learning and Socialization through Conversations, Center for Human Activity Theory, Kansai University, February 22, 2010.

Okada, M. (2010). Explanation or boxing performance?: Micro-analysis of the processes of participants' 'mutual monitoring' of each other's embodied actions. Invited lecture at the International Symposium on Language Learning and Socialization through Conversations, Center for Human Activity Theory, Kansai University, February 20, 2010.

岡田みさを (2009)「相互行為的コミュニケーションの様相：会話参与者による参加の調整」「電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループシンポジウム」招待講演、2009 年 12 月 11 日、札幌コンベンションセンター

柳町智治 (2008)「シンポジウム SLA 研究の再概念化：相互行為としての会話とその能力」企画および趣旨説明、「第 19 回第二言語習得研究会（JASLA）全国大会」、2008 年 12 月 13 日、北海道大学

Yanagimachi, T. & Okada, M. (2008). What are L2 speakers learning in natural conversations, an L2 or a “professional vision”? Paper presented at AILA 2008: The 15th World Congress of Applied Linguistics, Essen, Germany. August 28, 2008.

柳町智治（2007）「ワークショップ：インストラクション場面における『職業的/専門的な見方』とその組織化の様相」「第 20 回社会言語科学会研究大会」、2007 年 9 月 16 日、関西学院大学

岡田みさを（2007）「ワークショップ：インストラクション場面における『職業的/専門的な見方』とその組織化の様相」「第 20 回社会言語科学会研究大会」、2007 年 9 月 16 日、関西学院大学

〔図書〕（計２件）

小林ミナ・衣川隆生・池上摩希子・島田徳子・古川嘉子・森本郁代・柳町智治・山内博之(2009)『日本語教育の過去・現在・未来 第３巻 教室』凡人社（pp. 142-160 担当）

小林ミナ・日比谷潤子・岡田みさを・小野正樹・坂口和寛・名嶋義直・山田敏弘（2009）『日本語教育の過去・現在・未来 第５巻 文法』凡人社（pp. 125-152 担当）

６．研究組織

(1)研究代表者
柳町　智治（YANAGIMACHI TOMOHARU）
北海道大学・留学生センター・教授
研究者番号：60301925

(2)研究分担者
岡田　みさを（OKADA MISAO）
北星学園大学・経済学部・准教授
研究者番号：90364215